

# 出雲平野における原始・古代集落の分布について

田中義昭\*・西尾克己\*\*

On the distribution of primitive and ancient settlements in Izumo Plain

Yoshiaki TANAKA and Katsumi NISHIO

## I 緒 言

斐伊川・神戸川の堆積作用によって形成された出雲平野は山陰屈指の沖積平野であり、古代出雲史展開の主要な舞台であったことは周知のところである。北の島根半島の連山、南の中国山地北縁の山丘、東の宍道湖、西の日本海をそれぞれ控えた平野地帯は、それらの自然環境が境界をなして、他地域から画された孤立的な低地帯となっている。こうした自然的条件の在り方は、出雲平野を生産活動の基盤として生成したさまざまな歴史的集団に対して相対的な自己完結性を付与する一要因をなしたように思われる。

1984、85年の簸川郡斐川町神庭の荒神谷遺跡における銅剣・銅矛・銅鐸の一括大量出土という破天荒な発見に触発されて、われわれは出雲平野に分布する原始・古代集落遺跡の研究をいっそう系統的・組織的に、そして可能な限り全面的に推進することの必要性を痛感するに至った。

そこでまずは平野中最大クラスの集落遺跡とされる出雲市矢野遺跡を調査対象に選び、

拠点的な原始・古代集落の変遷史とその構造上の特徴を掴み、出雲平野における集落発達史の主要な側面を解明しようと試みた。1985年に第一次の調査として八野神社境内（矢野遺跡第2地点）の発掘調査を行った。その結果については『山陰地域研究』第3号に報告したところである。

さらに1986年夏と87年春に矢野遺跡第3地点を引き続いて発掘調査した。第3地点は畑地で、弥生土器、土師器、須恵器の散布が比較的多く見られ、吉備地方からの搬入品と思われる特殊土器が採集される等の注目すべき様相をもっている。発掘によって得られた遺物等は目下整理中であるが、遺跡の性格に関する概括的な知見は以下のものである。すなわち本地点は近世初期頃までは矢野集落の縁辺部に当り、その一部が墓地として使用されていた。その後集落地の拡張が行われ、この縁辺部にかなりの埋め立て乃至は盛土がなされたとみられる。出土遺物の殆どはこの埋土に含まれていたことが判明している。このような事情から第3地点では弥生時代や古墳時代の明確な生活遺構は検出できなかった。中核的な古代集落遺跡の究明は他日を期さねばならない。

出雲平野における原始・古代集落研究のい

\* 島根大学考古学研究室

\*\* 島根県教育庁文化課主事

ま一つの課題は、平野一帯に分布する集落遺跡の実相を正確に把握して、集落群のグルーピングとその変遷過程を明らかにすることである。1987年度はこの課題にも取り組んだ。出雲平野集落遺跡研究会のメンバーを中心に島根大学考古学専攻生を加えて、8月1日より5日までの5日間、主として神戸川の両岸と旧斐伊川筋を踏査した。調査の2日目には科研「古代出雲」の古代史・社会民俗・自然の3研究班と合同の general survey を実施した。

本報告は上記分布調査の実施状況と得られた諸事実に関する若干の見解を提示しようとするものである。なお、踏査の実施に当っては出雲平野の地形、とりわけ旧自然堤防状の微高地のまとまりを考慮して、神戸川左岸・同右岸・旧斐伊川筋をそれぞれ調査域単位とした。よって報告は神戸川右岸を二地区に、同左岸を同じく二地区に分けて行う。具体的には右岸の場合は平野南東部の丘陵縁に沿って分布する微高地と天神遺跡を載せる複雑な広がりをもつ微高地に区分し、左岸は北、南の2群の自然堤防ごとに分けて記述する。また平野北辺については、遺跡群は旧斐伊川の東西に延びる自然堤防上にあるが、これは神戸川右岸の項に含めておいた。

矢野遺跡付近については今回は十分な分布調査は実施しえなかったが、従来知られたことを参考にして右岸の項で取り扱うこととした。

本稿の構成については、IIにおいて分布調査の実施状況と成果を示し、III、IVで若干の考察と総括を行っている。

## II 1987年度の分布調査とその成果

### 1. 神戸川右岸

#### 1) 出雲平野北部方面

##### 里方別所遺跡<sup>19)</sup>

出雲市里方町別所に所在する遺跡で、東西に延びる斐伊川の旧自然堤防上（西流していたときに形成されたもの）に立地する。

本遺跡は、1962年の山持川河川改修工事の際に発見され、東西約50mの範囲より土器片が採集されている。出土遺物として、弥生土器、須恵器、土師質土器があり、弥生時代後期末から中世までの遺跡と考えられる。

##### 山持川川岸遺跡<sup>19)</sup>

本遺跡は、出雲市西林木町に所在する。里方別所遺跡の東500mに位置しており、東西に延びる旧自然堤防の後背地に面した集落址と考えられる。1962年の山持川改修工事の際に遺物が採集され、また1980年に<sup>19)</sup>出雲市教育委員会により、発掘調査が行われている。<sup>15)</sup>出土遺物は弥生時代中期末から古墳時代前期までの土器が殆どであり、これらの時期を前後する遺物は見られないことより、きわめて居住期間が限定された集落跡と考えられる。なお、1980年調査の時の遺物出土状態は、意識的な投棄の可能性があると考えられており、集落跡とはただちに判断し難いとする意見もある。

##### 岡野宅付近遺跡

出雲市稲岡町122-4岡野宅付近に所在する遺物散布地で、一帯は水田となっている。

遺物としては、古墳時代初頭と考えられる土師器片と、土師質土器片が採集されている。今回の分布調査により、新たに発見された遺跡である。

#### 2) 馬木町～上塩冶町下沢方面

第1図 出雲平野北部遺跡位置図  
(1/25000)



表1 出雲平野北部自然堤防の遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺物	備考
1	圓光山善正寺西	出雲市荻苳町239番地付近	土師質土器片	旧自然堤防上に立地
2	稲岡町116番地東	出雲市稲岡町116番地付近	土師質土器片	〃
3	稲岡町174番地東	出雲市稲岡町174番地付近	土師質土器片(糸切か)	〃
4	荻苳町258番地西	出雲市荻苳町258番地付近	土師質土器片	No.3とつながる可能性
5	岡野宅付近	出雲市稲岡町112-5番地付近	弥生土器片 土師器片(古墳時代初頭)	旧自然堤防上に立地
6	稲岡町226番地南	出雲市稲岡町226番地付近	土師器片	〃
7	稲岡町1073番地付近	出雲市稲岡町1073番地付近	土師質土器片(内側に黒袖)	同一遺跡か 旧自然堤防上に立地
8	〃	出雲市稲岡町1073番地付近	弥生土器片か 土師器片	
9	多福寺東	出雲市高岡町	土師質土器片	旧自然堤防上に立地
10	多福寺西	出雲市高岡町900番地付近	土師質土器片	同一遺跡か 旧自然堤防上に立地
11	〃	出雲市高岡町	土器片(不明)	
12	〃	出雲市高岡町899番地付近	弥生土器片 石器か	
13	〃	出雲市高岡町802-1番地付近	土師器片か	
14	高岡町682番地付近	出雲市高岡町682番地付近	土師質土器片(中世のものか)	旧自然堤防上に立地
15	高岡町722-1番地北東	出雲市高岡町722-1番地付近	土師質土器片	〃
16	里方町942-4番地南西	出雲市里方町942-4番地付近	土師器片	〃
17	高浜駅周辺	出雲市里方町高浜	弥生土器片(後期か)	〃

### 三反谷遺跡

本遺跡は、上塩治町半分 番地付近に所在する。神戸川が山間をぬけ、出雲平野へ流れ出る地点の東岸、低丘陵緩斜面上に立地す

る。標高は約15mで、現状は畑地である。島根県教育委員会の調査によって、縄文時代後期、古墳時代、中世の複合遺跡であることが<sup>14)</sup>確認されている。

今回の調査では、周知の遺跡の範囲内より土師質土器片、須恵器片を採集したが、特別に新しい知見は得られていない。

**築山遺跡**

上塩冶町116番地付近に所在する。南北に延びる微高地上に立地し、すぐ北側には上塩冶築山古墳が存在する。

1985年、出雲市教育委員会により、範囲確認のための発掘調査が実施された<sup>24)</sup>。この調査では、時期が明確な遺構は確認できなかったものの、須恵器の子持壺、円筒埴輪片、土師器、須恵器など古墳時代の遺物が出土している。

今回の調査では、④で土師質土器を採集したが、これは築山遺跡の範囲がさらに東側に広がる可能性を示すものである。

**宮松遺跡**

出雲市上塩冶町宮松に所在する。南から延びる微高地上に立地し、すぐ南側には築山古墳が存在する。本遺跡では、古墳時代後期後半の須恵器、奈良時代及び中世の土師質土器が採集され<sup>19)</sup>、また主要地方道出雲仁多線新設工事の際に須恵器が大量に出土している<sup>24)</sup>。

表2 馬木町～上塩冶町下沢の遺跡

No.	遺 跡 名	所 在 地	遺 物	備 考
1	下沢会館北遺跡	出雲市上塩冶町下沢中2604-7付近	土器片	微高地上に立地
2	下沢会館南遺跡	出雲市上塩冶町下沢西2598-5付近	須恵器片 土器片	〃
3	光明寺南遺跡	出雲市馬木町北町太田幸吉宅付近	土器片	丘陵斜面上に立地
4	築山東遺跡	出雲市上塩冶築山東1729付近	土器片 土師器片	微高地上に立地
5	宮松東遺跡	出雲市塩冶町	須恵器片 土器片	〃
6	三反谷遺跡	出雲市上塩冶町半分		丘陵斜面上に立地
7	寿昌寺西遺跡	出雲市上塩冶町半分357	土器片	微高地上に立地
8	池田遺跡	出雲市上塩冶町半分482-1	土器片	低丘陵縁辺に立地
9	角田西遺跡	出雲市上塩冶町宮松996付近	須恵器片 土器片	微高地上に立地
10	上塩冶町109付近遺跡	出雲市上塩冶町109付近	須恵器片 土器片	〃
11	出雲工業西遺跡	出雲市医大南町2丁目1番地	須恵器片 土器片	低丘陵縁辺に立地

今回の調査では⑤と⑩より須恵器片、土師質土器片が採集された。採集地点の位置及び遺物の内容から宮松遺跡と関連するものと考えられる。

**角田遺跡**

出雲市上塩冶町角田に所在する。立地は、標高8mの微高地上である。本遺跡では、土地改良の際に、須恵器・土師器が大量に出土し、また本遺跡から南へ100mの地点でも土師器片、須恵器片の散布を確認している。

今回の分布調査においては⑨で須恵器片、土師質土器片を採集した。これより角田遺跡の範囲はさらに拡大するものと思われる。

3) 天神町～塩冶町付近

**高西遺跡**

出雲市塩冶町揚下道に所在する遺物散布地である。立地は神戸川によって形成された旧自然堤防上で、現在は宅地となっている。天神遺跡の東側に位置し、出雲市教育委員会の実施した分布調査等から、弥生時代以降の遺跡と考えられている<sup>27)</sup>。

今回の調査では、須恵器片、土師器片が多数採集された。採集地点は⑫⑬⑭であるが、

いずれも周知の遺跡範囲に含まれる。

### 神門寺付近遺跡

出雲市塩冶町下塩冶821の神門寺境内及びその周辺に所在し、神戸川の旧自然堤防が形成した標高7～8mの微高地上である。

神門寺付近から、古代の寺院瓦が出土することは古くから知られており、古代寺院の存在が考えられてきた。この寺院跡を古志新造院に比定する説<sup>9)</sup>、朝山郷新造院に比定する説<sup>4)</sup>もあり、当地方における仏教文化を知る上で貴重な遺跡である。

1982年から1985年にかけて出雲市教育委員会によって寺域確認のために発掘調査が実施された<sup>20), 21), 23)</sup>。その折、瓦の他須恵器、土師器、中近世の陶磁器、土師質土器などが出土している。また、境内南側と本堂西側からは弥生土器の出土が確認された。さらに、神門寺境内の東側より、縄文土器が採集されたことが報告<sup>8)</sup>されている。

今回の調査においては、本遺跡内の⑬より、須恵器、土師質土器片数点採集した。また本遺跡の南約150mに位置する⑫からも、土師質土器数点を採集した。

### 塩冶小学校付近遺跡<sup>27)</sup>

出雲市塩冶町場に所在する遺物散布地である。立地は旧自然堤防によって形成された微高地上で、現在は宅地、畑地となっている。出雲市教育委員会の分布調査によれば、採集された遺物から、隣接する弓原遺跡、高西遺跡と時期的に併行すると考えられる。

今回の調査によって、周知の遺跡範囲内の⑯より須恵器片と土師質土器片が、⑰より須恵器片と土師質土器片が採集された。また⑱は本遺跡北側に位置しており、わずかに周知の範囲を外れるが、塩冶小学校付近遺跡がさらに拡大するものと考えられる。

### 天神遺跡

出雲市天神町から塩冶有原町にかけての広

表3 天神町・有原町・塩冶町の遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺物	備考
12	神門寺西公園北東遺跡	出雲市塩冶町821付近	土器片	一括して神門寺付近(境内)遺跡とする微高地上に立地
13	神門寺付近遺跡	〃	須恵器等 土器片	
14	高西北遺跡	出雲市塩冶町高西北	土器片	
15	高西遺跡	出雲市塩冶町揚下道	須恵器片 弥生土器片 その他土器片など多数	No14～16は周知の高西遺跡内である旧自然堤防上に立地
16	〃	〃	恵器片 土師器片 土師質土器片	
17	塩冶小学校付近遺跡	出雲市塩冶町上小路	須恵器片 土器片	
18	〃	出雲市塩冶町上大南	須恵器片 土師質土器	No17は周知の塩冶小学校遺跡の北端であり範囲が拡大する可能性がある旧自然堤防上に立地
19	〃	出雲市塩冶町上小路	〃	
20	天神遺跡	出雲市有原町6-34	土師器(高坏の脚部を含む)	
21	〃	出雲市天神町小松	土器片(近世以降を含む)	No24～26は周知の天神遺跡の範囲が拡大する可能性がある。No20～26を天神遺跡とする旧自然堤防上に立地
22	〃	出雲市天神町小路	土師器片 須恵器片	
23	〃	〃	土師質土器片	
24	天神西遺跡	出雲市天神町小松	弥生土器片 中世以降の土器	
25	〃	〃	弥生土器片 須恵器片 石器	
26	〃	〃	土師器片多数	

範囲な地域に所在する出雲平野の代表的な集落遺跡である。標高7mの微高地上に立地し、現在遺跡一帯は宅地化が進行しつつある。

本遺跡の発掘調査は、1971年、1975年、1981年、1985年に出雲市教育委員会が、また1978年には出雲考古学研究会が実施している。

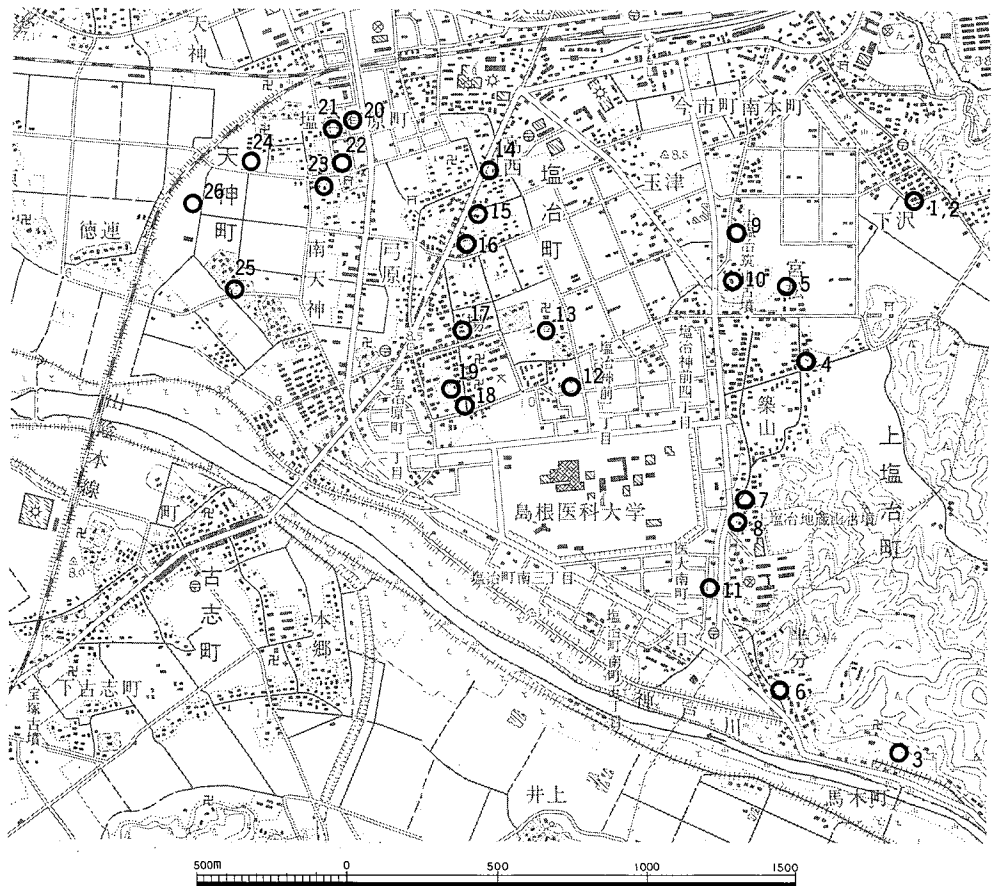
1971年の調査では、弥生時代中期後半の壺棺墓が発見された。他に弥生時代中期後半と古墳時代後期の溝状遺構、奈良時代から平安時代にかけての建物跡が検出されている。

1975年の調査では、弥生時代中期中葉の土壇墓群、溝状遺構、古墳時代後期の溝状遺構、土壇が発見された。また奈良時代以前の掘立

柱建物群跡を検出したが、これは官衙的な色彩の濃い遺構であることが確認されている。

1978年の調査では、古墳時代中期の土器溜と平安時代頃の掘立柱建物跡を検出した。土器溜については、そこから赤色顔料を塗付した土器が出土し、周辺からの土製勾玉の出土などから、祭祀的な性格の強い遺構であることが指摘されている。また建物跡付近より緑釉陶器が出土したことからも、官衙跡の可能性が考えられている。

1981年の調査では、奈良時代と推定される掘立柱建物跡、鎌倉時代末から室町時代にかけての掘立柱建物跡、溝状遺構などが確認さ



第2図 馬木町～上塩冶町・天神町・塩冶町方面遺跡地図  
(1/250000)

れた。

1985年の調査では、弥生時代中期の土墳墓群が確認された。<sup>25)</sup>他に古墳時代後期頃の溝状遺構、同じく古墳時代後期と推定される竪穴住居跡が検出されている。遺物は、弥生時代中期中葉に含まれる壺、甕、高坏などが多量に出土した。また土師器、土製丸玉、管玉なども出土している。

以上より、本遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代や中世の遺構を含有する複合遺跡であることがわかる。

今回の踏査は、塩冶有原町から天神町周辺について実施した。本遺跡東側には現在では住宅が建ち並んでいるが、その建設によって遺跡の多くの部分が破壊された可能性がある。西側は水田地帯になっている。採集遺物には弥生時代後期と考えられる高坏の脚部があるが、大半は時期不明の土師質土器である。

## 2. 神戸川西岸

### 1) 古志町天庭～芦渡町方面

神戸川左岸に所在する、神戸川の旧自然堤防が形成した微高地である。これまでは遺物の散布は報告されていないが、今回の調査で、古墳時代以降の遺物が散布が確認された。

遺物は、須恵器と土師質土器であり、いずれも小片のため、詳細な時期などについては不明である。しかし、遺物の散布は、この微高地上の全体にわたる連続的なものであることが判明した。

### 2) 古志本郷町～知井宮町方面

#### 古志本郷遺跡<sup>14)</sup>

本遺跡は、出雲市古志町本郷1309番地付近に所在する。神戸川の旧自然堤防上に立地し、弥生時代から中世に至る遺物散布地として知られている。現状は畑で、遺物は、広範囲にわたって散布しており、過去に土師器片・須

恵器片・シジミ貝等の散布が確認されている。

今回の踏査においても、弥生土器片・土師器片・土師質土器片・須恵器片、その他小片を多数採集したが、特に、須恵器片の散布が多く見られた。綿密な調査を行えば、遺跡の範囲はさらに拡大するものと考えられ、②④・②⑥・②⑦・②⑧は、そうした関連の遺跡と思われる。但し、②④は近年の畑造成の際に、他の場所から土が運ばれて来た可能性がある。また②⑥・②⑦・②⑧は、本遺跡の南西に位置し、神戸川の旧自然堤防上の田畑遺跡へ続く場所に立地していることから、本遺跡との関連も考えられよう。

#### 田畑遺跡<sup>7), 14)</sup>

本遺跡は、出雲市下古志町田畑に所在し、神戸川の旧自然堤防上に位置する弥生時代の遺物散布地である。現状は、田・畑で、東西約100m・南北約50mの範囲にわたっている。昭和47年10月の神西・神門地区田圃整理事業に伴って、本遺跡は発見された。その際に、遺構として「大小5・6個の落ち込み」が検出されているが、性格は不明とされている。

出土遺物として、弥生時代中期中葉の壺形土器・甕形土器・高坏形土器・石庖丁状の石器などが認められている。

今回の踏査において、弥生土器片・須恵器片・土師質土器片が採集されている。

#### 上組遺跡<sup>14)</sup>

出雲市下古志町上組に所在し、神戸川の旧自然堤防上に立地する古墳時代から中世に至る遺物散布地である。

本遺跡は、田畑遺跡の西、宝塚古墳の東に位置する。

今回の踏査において、本遺跡の東方近くの③⑩で須恵器片・土器片を採集した。遺物、立地から考えて、本遺跡の範囲は拡大すると思

表4 古志町天庭～芦渡町の遺跡

No.	遺 跡 名	所 在 地	遺 物	備 考
1	古志天庭遺跡	出雲市古志町60番地付近	土師質土器片	旧自然堤防上に立地
2	〃	出雲市古志町	須恵器片 土師質土器片	〃
3	〃	出雲市古志町	須恵器片 土師質土器片	〃
4	〃	出雲市古志町	須恵器片	〃
5	弘法寺参道付近遺跡	出雲市古志町神北中央2013付近	土師器片 須恵器片	〃
6	二軒茶屋北遺跡	出雲市古志町	土師質土器片	〃
7	二軒茶屋遺跡	出雲市下古志町546付近	土師質土器片	〃
8	下古志町402付近遺跡	出雲市下古志町402付近	高坏脚部 土師質土器片	〃
9	正連寺北遺跡	出雲市下古志町555-3付近	土師質土器片	〃
10	正連寺北西遺跡	出雲市下古志町544-4付近	土師質土器片	〃
11	下古志天満宮東遺跡	出雲市下古志町521付近	土師質土器片	〃
12	〃	出雲市下古志町	須恵器片 土師質土器片	〃
13	下古志天満宮西遺跡	出雲市下古志町435-8付近	土師質すり鉢	〃
14	〃	出雲市下古志町500	須恵器片 土師質土器片	〃
15	阿弥陀寺西遺跡	出雲市下古志町407	須恵器片	〃
16	第2出雲市民病院東遺跡	出雲市下古志町	土師質土器片	〃
17	芦渡町658-1付近遺跡	出雲市芦渡町658-1付近	土師器片 土師質土器片	〃
18	極楽寺西遺跡	出雲市芦渡町439-6・442-4	須恵器片 土師質土器片	〃
19	後田遺跡	出雲市芦渡町後田424	土師質土器片	〃
20	第2出雲市民病院南遺跡	出雲市知井宮町254-5付近	土師質土器片	〃
21	〃	出雲市知井宮町東原245	須恵器片 土師質土器片	〃
22	〃	出雲市知井宮町北組293付近	土師質土器片 陶器片	〃
23	〃	出雲市知井宮町	土師質土器片 陶器片	〃

われる。

#### 知井宮多聞院遺跡

出雲市知井宮町本郷に所在し、東端には古志本郷遺跡が立地する神戸川の旧自然堤防の西端に位置している。

本遺跡の中心は、真言宗多聞院の境内地に当たり、1949年以来数次にわたる調査が行われているが、貝塚以外には遺構はあきらかでない<sup>14)</sup>。

1948年1月、杉原荘介が予備調査を行い、翌49年7月以降、大谷従二を中心とした大社

考古学会が前後5回の発掘調査を行った。

1958年11月30日～12月4日には、杉原荘介の調査をうけて、大塚初重を中心とする明治大学考古学研究室が発掘調査を行った。

1949年以降の大社考古学会による調査では、弥生土器・骨角器・打製石器（石斧の未製品か）<sup>17)</sup>・鉄器・木炭<sup>5), 14)</sup>・鹿角装刀子等が出土している。土器は、「甕形、壺形、高坏形、器台形、注口土器等であり、底部は平底が主である<sup>5)</sup>」と報告されている。

昭和33年の明治大学考古学研究室の発掘に

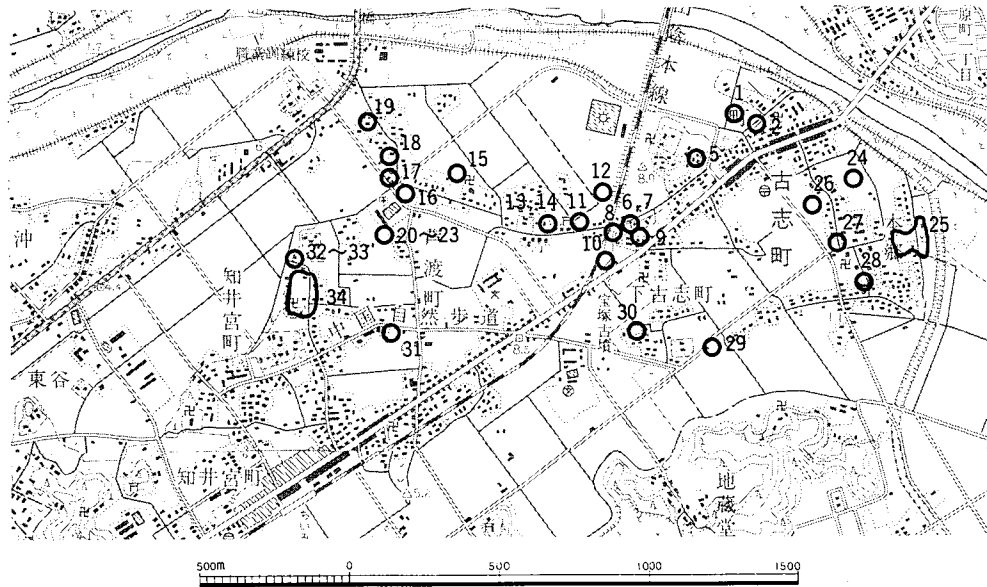


表5 古志本郷～知井宮町の遺跡

No	遺跡名	所在地	遺物	備考
24	古志天庭1144-1付近遺跡	出雲市古志町天庭1144-1付近	弥生後期土器片 土器片 須恵器片 近世前半代唐津系のすり鉢・石	古志本郷遺跡と関連か旧自然堤防上に立地
25	古志本郷遺跡	出雲市古志町本郷1309北側一帯	弥生土器片 土師器片 須恵器片 土師質土器片 その他	旧自然堤防上に立地
26	古志本郷1120付近遺跡	出雲市古志町本郷1120付近	弥生土器片	古志本郷遺跡と関連の旧自然堤防上に立地
27	古志幼稚園南西隅遺跡	出雲市古志町	須恵器片	〃
28	古志町 1129付近遺跡	出雲市古志町 1129付近	弥生土器片 須恵器片 土器片 陶磁器片	〃
29	田畑遺跡	出雲市下古志町田畑	弥生土器片 須恵器片 土師質土器片	旧自然堤防上に立地
30	上組付近遺跡	出雲市下古志町上組	須恵器片 土器片	上組遺跡と関連か旧自然堤防上に立地
31	嘉儀遺跡	出雲市神門町嘉儀	須恵器片 土器片	旧自然堤防上に立地
32	知井宮東原308-1付近遺跡	出雲市知井宮町東原308-1付近	土師質土器片	知井宮多聞院遺跡と関連か旧自然堤防上に立地
33	知井宮東原306付近遺跡	出雲市知井宮町東原306付近	弥生後期土器片 土器片	〃
34	知井宮多聞院遺跡	出雲市知井宮町本郷	弥生土器片 砥石?	旧自然堤防上に立地

表6 神門町沖～神西沖町方面の遺跡

No	遺跡名	所在地	遺物	備考
1	神門沖上生活センター付近遺跡	出雲市神門町沖	土師質土器片	旧自然堤防上に立地
2	神門町502付近遺跡	出雲市神門町502付近	土師質土器片	〃
3	引舟会館付近遺跡	出雲市神西沖町	江戸時代初期の唐津焼の皿片 土師質土器片	



第3図 神戸川左岸方面遺跡地図 (1/25000)

において、本遺跡の層位として明確な遺物包含層が3層あり、中間層を細分すると5層になることが確認された。また、貝塚の上層には、ヤマトシジミ等の淡水産の貝が、下層には、ハマグリ・アサリ・アワビ・サザエ等の鹹水産の貝が多く含まれていることが確認された<sup>2)</sup>。

出土遺物には、弥生土器（壺形・甕形・坏形・高坏形・器台形等）、古式土師器（壺形・甕形・高坏形等）、石器（石斧未製品・砥石）、土製品（土錘・紡錘車）、骨角器、貝輪片等が上げられる。土器は、弥生時代中期中葉～後期後葉（鍵尾式）のものであり、形式的には四型式が認められ、それぞれ知井宮Ⅰ～Ⅳ式の型式名が与えられている<sup>5)</sup>。

今回の踏査においても、本遺跡中心周辺で多数の土器片（多くは弥生土器）や、砥石かと思われる石片を採集した。さらに、本遺跡から北東の㊸で土師質土器片、㊹で弥生後期の土器片とその他を採集した。両遺跡は、ともに本遺跡から近いことなどを考えると、本遺跡に関連すると考えられ、本遺跡の範囲が拡大するものと思われる。

### 3) 神門町沖～神西沖町方面

この旧自然堤防は、神戸川左岸の旧自然堤防の中で最も北側に位置し、神西湖の北より北東にあって、現国道9号線にほぼ平行して東西方向に延びている。

これまで、この微高地上では遺物の散布は報告されていないが、今回の調査では3つの地点で遺物を採集した。

神西沖町引舟会館付近では、江戸時代初頭の唐津焼の皿を採集し、その他、神門町内で2か所、土師質土器片が採集されているが、詳細な時期については不明である。

### 3. 大社町方面

出雲平野の北西部に位置する大社町は、北

には北山山塊を望み、その中央部に東西10km、南北10km、標高7～10mの砂丘が存在する。また東方から南にかけて出雲平野が開け、南方には神戸川が西流する。この地域の南側一帯は神戸川河口として、「神門水海<sup>かんどのみづうみ</sup>」と呼ばれる周囲約19kmの入海がかつて広がっていたところである。

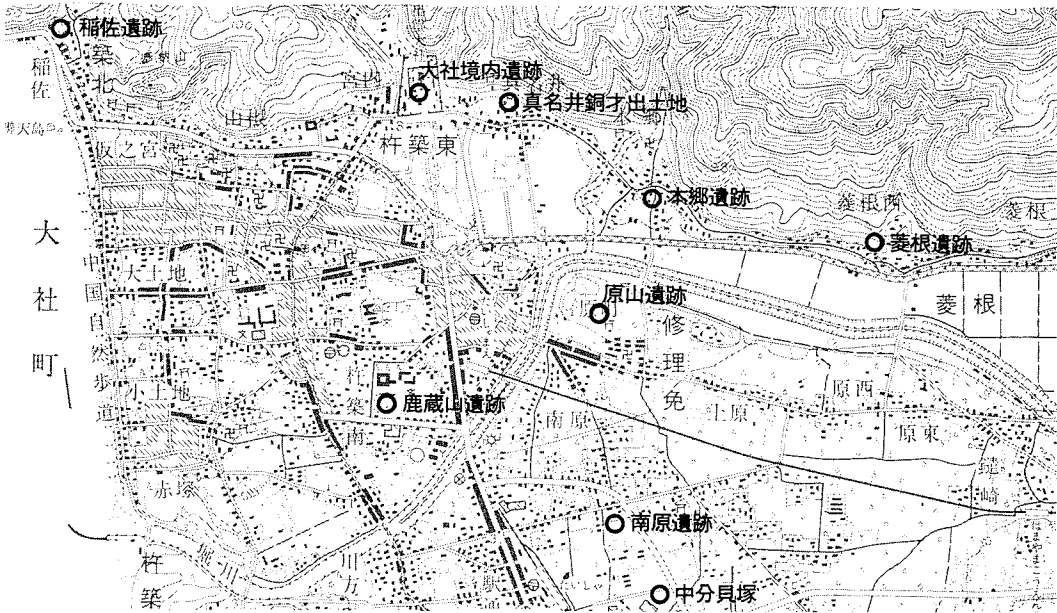
縄文時代の遺跡としては、早・前期の菱根<sup>ひしね</sup>遺跡<sup>14)</sup>、後・晩期に属する原山遺跡<sup>はらやま</sup>、大社境内遺跡<sup>8)</sup>が知られ、北山南麓の一帯が数千年前から生活の場であったことが窺われる。

弥生時代の遺跡としては、前述の大社境内遺跡、原山遺跡の他、南原遺跡<sup>いなき</sup>、稲佐遺跡<sup>いなさ</sup>が加わる。また、祭祀関係遺物として、命主神社境内より銅戈、硬玉製勾玉が出土している。特に銅戈については、九州で鑄造された、いわゆる中広形銅戈に属し、文化伝播の点から重要な意味を持つ。

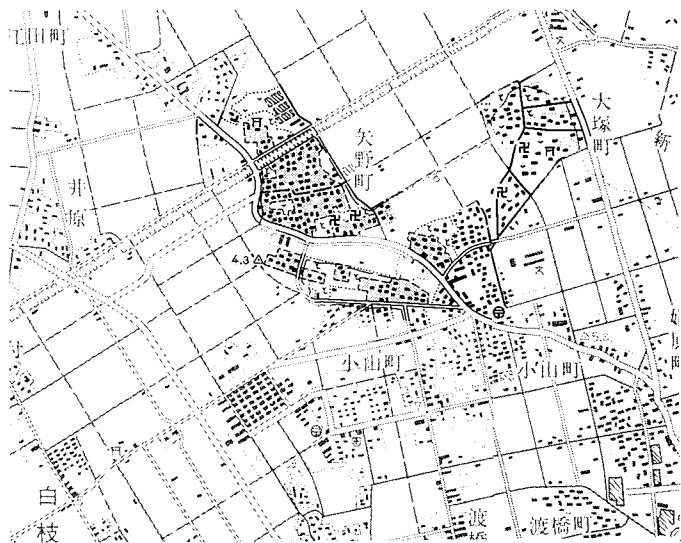
古墳時代に入ると、鹿蔵山遺跡<sup>しかくさやま</sup>、修理面本郷遺跡<sup>22)</sup>などが出現し、遺跡の規模が拡大する傾向を見せる。しかし、古墳としては小規模なものが数基確認されているのみであり、内部主体も箱式石棺がほとんどである。このような遺跡の様相は、神門水海、北山山塊などにより耕地を制限され、出雲平野の他の地域に比して、地域的な生産力が低かったことを推定させる。

奈良時代以降～平安初頭頃の遺跡には、中分貝塚<sup>なかつん</sup><sup>16)</sup>がある。この遺跡の東端には南原遺跡が所在するが、出土品や層序が類似することから、一連の貝塚と考えられる。

今回の調査では、南原遺跡から須恵器片、土師質土器片、陶器片が採集された。また大社町修理面本郷西の万代宅付近より、土師質土器片、陶器片の散布が確認されている。付近には、前述した修理面本郷遺跡が所在する



第4図 大社町方面遺跡地図 (1/25000)



第5図 矢野遺跡と周辺の遺跡地図 (1/25000)

が、この遺跡の範囲が拡大する可能性もある。

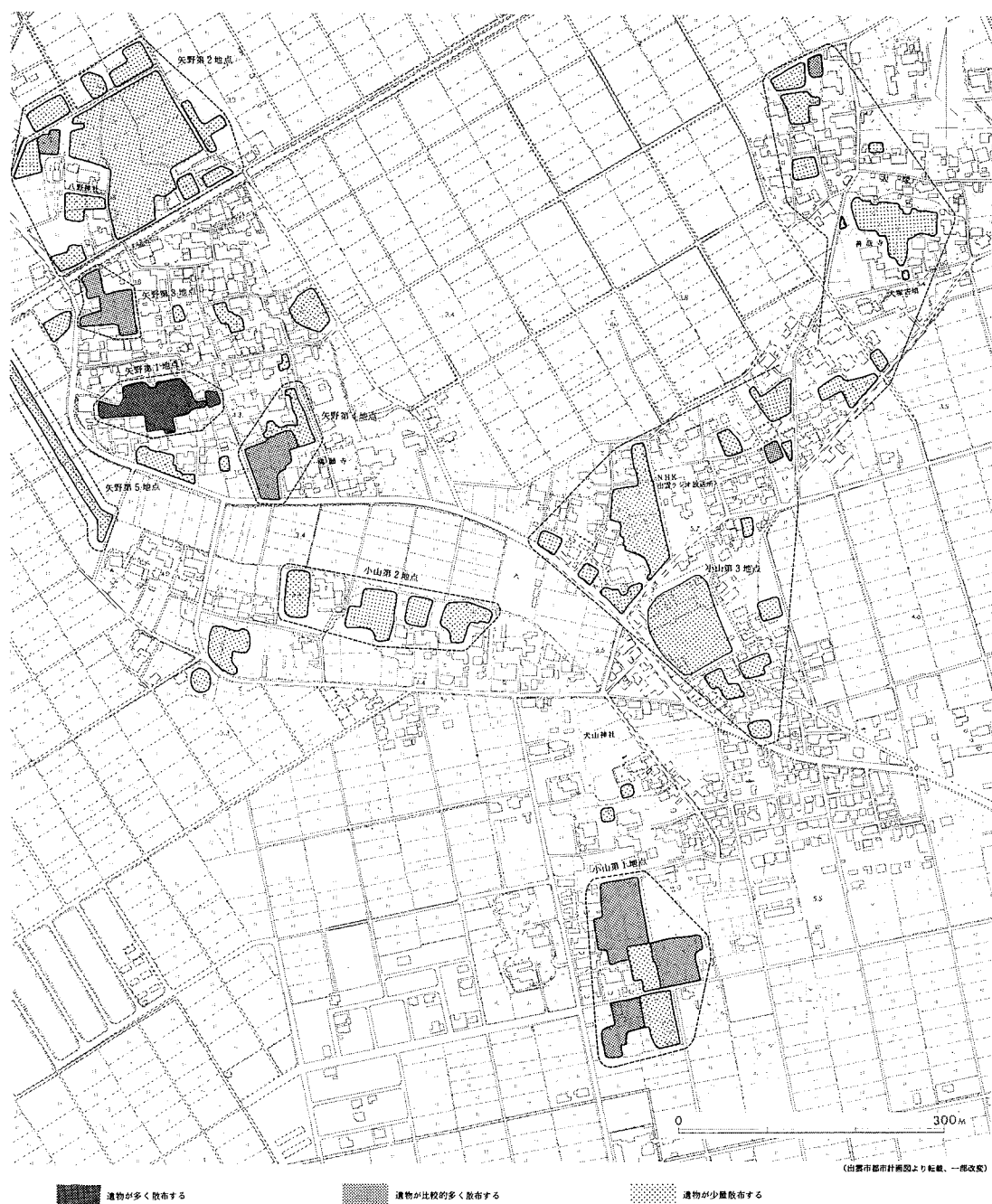
#### 4. 平野中央部

##### 矢野遺跡とその周辺

出雲平野のほぼ中央、出雲市矢野町に所在する。自然堤防がいくつか重なり合っ

た微高地の北端部に位置し、周辺の同じ微高地上に立地する大塚遺跡(大塚町)、小山遺跡(小山町)と共に全体として四絡遺跡群を形成している。

矢野遺跡からは、縄文時代後期から古墳時



第6図 四絡遺跡群の分布 (文献26より転載)

代後期以降にわたる各時代<sup>1), 2), 3)</sup>ごとの遺物が知られる。また弥生時代後期に吉備地方よりもたうされたと考えられる特殊器台形・壺形土器

が採集されている。これらのことから、本遺跡は出雲平野における原始・古代集落遺跡の拠点の一つとして捉えられ、過去にいく度か

発掘調査が行われている。

1953年に、山本 清を中心に島根考古学会が矢野貝塚（矢野遺跡第1地点）を発掘し、貝層の調査、未攪乱の遺物包含層の確認を行った<sup>28)</sup>。また、弥生時代前期から古式土師器にいたる多量の土器片、磨製石斧、骨角器等の遺物が出土している。

1972年には川上 稔・西尾克己らが、再び同地点の発掘<sup>7)</sup>を行い、弥生時代後期前半の土壌を検出した。遺物は、土壌内より土器片多数、細身の碧玉製管玉等が出土している。

1985年には、田中義昭ら出雲平野集落遺跡研究会が矢野遺跡の北端、八野神社周辺（第2地点）<sup>29)</sup>を発掘調査した。また1986年から1987年にかけては、同研究会が、矢野貝塚の北80mの地点（第3地点）を発掘している。前者からは古墳時代前期と思われる竪穴住居址、その他多数のピット状遺構を検出した。後者は前述した特殊器台形・壺形土器が表面採集されていたが、発掘の結果、その存在は否定された。この地点における土層の一部には未攪乱の遺物包含層となるものがあるものの、その大半は近世以降の埋め土及びそれ以前に攪乱を受けたものであり、明確な遺構は確認し得なかった。だが、遺物は弥生時代前・中期をはじめとする多量の土器の他、特殊器台形・壺形土器が出土している。他に細身の碧玉製管玉、各種石器、玉作遺跡の存在を示す筋砥石、水晶、メノウ等の剝片や原石を出土し、矢野遺跡の性格を物語る新たな資料を加えた。

その他、1985年に、出雲市教育委員会が第2地点の東端部を発掘し、溝状遺構、ピット状遺構、遺物では環状石斧などを確認している。

周辺の大塚遺跡、小山遺跡からは弥生時代中期後葉以降の遺物が採集されている。

以上のように過去数回にわたって発掘調査が実施されてきたが、未だ矢野遺跡の全様を掴むには至っていない。しかし、各時代ごとの出土遺物の量を比較してみた場合、縄文時代後、晩期のものは非常に少なく、弥生時代前期から古墳時代前期にかけてのものがその大半を占めているのがわかる。その後、古墳時代中期の遺物は減少するが、後期以降のものは再び増加する傾向を示す。これらのことは、矢野遺跡の変遷のあり方を反映していると考えられる。

#### 白枝荒神屋敷遺跡

出雲市白枝町に所在し、矢野遺跡より南西へ約1kmの地点に位置する。立地は旧自然堤防上である。これまでに、弥生時代中期後半の甕の口縁と高坏の脚部、弥生時代後期の甕の口縁、その他に土師質土器が採集されている。

今回の分布調査においても、甕の口縁を確認している。この土器は、口縁は肉厚で外傾して立ち上り、下端部はそのまま下方に突出している。胴部内面はヘラケズリを施す。口径は36.4cmを測り、弥生時代後期（藤田編年<sup>13)</sup> III期に属するものと思われる。

- 註1) 山本 清 「出雲市大塚町土器散布地」（『島根考古学』第2号）、1948年
- 2) 池田満雄 「四絡小学校付近出土土器」（『出雲市の文化財』第1集）、1956年
- 3) 池田満雄 「矢野貝塚」「矢野貝塚出土品」（『出雲市の文化財』第1集）、1956年
- 4) 近藤 正 「出雲国風土記所載の新造院とその造立者」（『日本歴史考古学論叢』2所収）、1958年
- 5) 大塚初重 「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」（『考古学集刊』第2冊1号）、1963年

- 6) 出雲市教育委員会 『出雲市天神遺跡－調査の記録－』, 1972年
- 7) 東森市良 「破壊に瀕している低湿地遺跡」(『季刊文化財』第20号), 1973年
- 8) 宍道正年 『島根県の縄文式土器集成 I』, 1974年
- 9) 山本 清 「出雲国風土記」『風土記』, 1975年
- 10) 出雲市教育委員会 『天神遺跡』, 1977年
- 11) 村上 勇・川原和人 「出雲原山遺跡の再検討－前期弥生土器を中心として－」(『島根県立博物館調査報告』第2冊), 1979年
- 12) 出雲考古学研究会 「天神遺跡の諸問題」(『古代の出雲を考える』1), 1979年
- 13) 藤田憲司 「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』64-4), 1979年
- 14) 島根県教育委員会編 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』, 1980年
- 15) 川上 稔・赤沢秀則 「出雲・山持川川岸遺跡」(『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅷ), 1981年
- 16) 西尾克己 「大社・中分遺跡」(『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅷ), 1981年
- 17) 大谷從二・大國一雄・広瀬信憲 「多聞院貝塚の発掘」(『貝塚』第13号) 1950年, 柏書房『貝塚』所収, 1981年
- 18) 出雲市教育委員会 『建設省職員宿舍新築に伴う 天神遺跡発掘調査報告書』, 1982年
- 19) 出雲考古学研究会 「出雲平野の集落遺跡 I」(『古代の出雲を考える』3), 1983年
- 20) 出雲市教育委員会 『神門寺境内廃寺第1次発掘調査概報』, 1983年
- 21) 出雲市教育委員会 『神門寺境内廃寺第2次発掘調査概報』, 1984年
- 22) 大社町教育委員会 『鹿蔵山遺跡』, 1984年
- 23) 出雲市教育委員会 『神門寺境内廃寺』, 1985年
- 24) 出雲市教育委員会 『塩冶地区遺跡分布調査報告』I, 1986年
- 25) 出雲市教育委員会 『建設省新庁舎建築に伴う 天神遺跡発掘調査報告書』IV, 1986年
- 26) 出雲考古学研究会 「出雲平野の集落遺跡 II－矢野遺跡とその周辺－」(『古代の出雲を考える』5), 1986年
- 27) 出雲市教育委員会 『塩冶地区遺跡分布調査報告』II, 1987年
- 28) 山本 清 「島根県出雲市矢野町貝塚調査概報」1957年, 『山陰地域研究』第3号1987年に再録
- 29) 田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本 清・磯田由紀子 「出雲市矢野遺跡の研究 I」(『山陰地域研究』3), 1987年

### III 出雲平野における集落遺跡の分布とその変遷

本項では分布調査によって知られた諸事実と、従来より明らかにされてきた出雲平野における原始・古代集落の分布に関する知見を合せて、これを時代順に辿ることとする。

#### 1. 縄文時代

縄文時代の遺跡として現在までに確認されているものは数箇所過ぎない。そのうちもっとも時期の古い遺跡として知られているのは縄文早期の土器を出土した大社町菱根遺跡である。この遺跡は北山南麓の小扇状地に位置している。これまでに明確な遺構は捉えられていないが、出雲平野の縁辺に最初に現われた集落として、あるいは当時の自然環境を明らかにするうえで重要な遺跡といえる。

縄文時代後期の遺跡としては、磨消縄文を

施した土器が出土している大社町原山遺跡、出雲市矢野遺跡、同市三反谷遺跡をあげることができる。原山遺跡は砂丘上に位置<sup>2)</sup>し、矢野遺跡はしばしば触れられるように平野中央の微高地上<sup>3)</sup>に、そして三反谷遺跡は平野南辺の神戸川に沿った微高地上にそれぞれ立地<sup>4)</sup>している。これらにより出雲平野にもようやく定着的な原始集落の建設が開始されたことが推定できる。

縄文時代晩期には大社町出雲大社神域遺跡<sup>5)</sup>が出現する。矢野遺跡でも晩期の甕形土器かとみられる資料が採集されており、今後もこの時期の遺跡がさらに発見される可能性は十分ある。

以上の後期、晩期の遺跡では、総じて弥生時代以降の遺物が出土しており、複合的な遺跡とすることができる。このことは、一方で縄文時代中期の遺跡が未確認であることとも合せて、出雲平野の形成と集落の出現を考える際に一つのポイントといえるかも知れない。

出雲平野においては、縄文時代の遺跡は以上のように少数でかつ内容の不明確なものがほとんどである。このことは同じ出雲地方にあっても、多数の縄文遺跡が確認されている宍道湖東部から中海周辺部とは対照的である。調査件数の多寡に応じた現象という問題もあろうが、それ以上に、出雲平野を形成した斐伊川・神戸川の沖積作用との関連性が注意されねばならない。今後そうした平野形成の過程の究明と合せて縄文遺跡の調査・研究を推進する必要があると考える。

## 2. 弥生時代

弥生時代初期における出雲平野の様相は、現在の神西湖の元とされる「神門水海」が平野の広い範囲を占め、そこに斐伊川・神戸川が流れ込むという姿であったと思われる。や

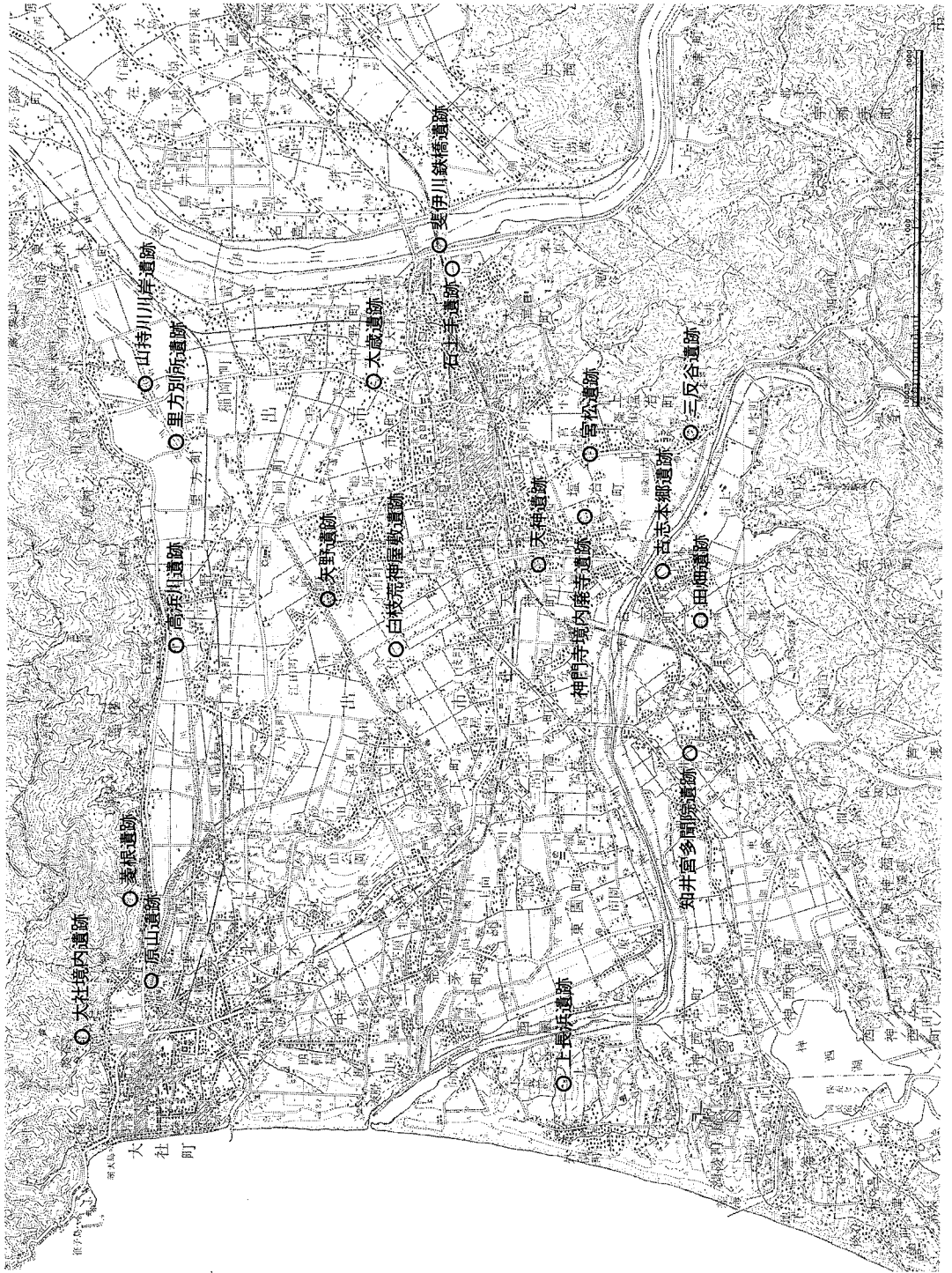
がて弥生時代末期には、この「入海」が外海から隔離されて後と言うところの「神門水海」の原形が形成されたものと考えられる。このことは出雲市知井宮多聞院遺跡において、貝層の下部から上部に移るにつれて、貝の種類が鹹水性のものから淡水性のものに変化する<sup>6)</sup>という事実<sup>6)</sup>に反映されている。

また当時は「入海（宍道湖）」の汀線も現在より西寄りであったとされ、したがって出雲平野そのものも今日のそれよりはかなり狭かったと思われる。

弥生集落址の立地をみると、砂丘・扇状地・自然堤防など多様であるが、大部分は標高5m以上の微高地上に位置している。砂丘上の遺跡としては原山遺跡、鹿蔵山遺跡、南原遺跡などがある。扇状地に位置する遺跡としては出雲大社神域遺跡、大社町修理免本郷遺跡、出雲市西林木町の伊努谷遺跡がある。自然堤防上にある遺跡としては出雲市天神遺跡、同市宮松遺跡、同市古志本郷遺跡、同市矢野遺跡、同市大塚遺跡、同市白枝荒神屋敷遺跡、同市里方別所遺跡をあげることができる。矢野遺跡と白枝荒神屋敷遺跡は標高5m以下の微高地上に占地しており、立地点のレベルという面ではやや例外的である。

また、山持川川岸遺跡の場合は、遺物包含層の下限が標高2.7mという低位に当り、この点からこの遺跡は集落址そのものとする<sup>7)</sup>ことが困難で、あるいは何らかの原因で遺物が流入したものと考えられる。さらに斐伊川鉄橋遺跡<sup>7)</sup>については現状は河床となっているのであるが、当時の集落の立地点が斐伊川の流路<sup>8)</sup>の変化にともなって水没ものと思われる。

次に時期ごとに遺跡の展開状況をみていく。弥生時代前期の遺跡としては、よく知られている原山遺跡がある。立地条件の一つは砂丘



第7図 出雲平野の主要な縄文時代・弥生時代の遺跡位置図



の背後に形成された湿地にあるとの指摘が早くからなされている。また出土土器に從來知られていた立屋敷式系統の外に板付式が含まれていることが知られ、出雲地方への弥生文化の直接的な伝播が説かれるに到っている。<sup>9)</sup> 前期の土器は矢野遺跡でも第1、第2、第3地点より出土しているが、出雲平野全体からすればなお限られた場所に集落が営まれた段階とせざるをえない。

弥生時代中期中葉段階になって多聞院遺跡、天神遺跡、田畑遺跡等が出現してくる。<sup>11)</sup> これらは「神門水海」を取り囲むような形で分布している。前期から引き続いて集落が営まれている矢野遺跡でも貝塚が形成されており、この段階に到ってもなお採集生活に依存する状態が存続していることが知られる。<sup>12)</sup> 一方、天神遺跡のように濠をともなう大規模な集落が成立していることなどからすれば、弥生時代中期は平野の人口がかなり増大した時期ともいえよう。<sup>13)</sup>

弥生時代中期後葉から後期初頭にかけては、いっそう集落数が増加する。この段階の遺跡として知られているものは出雲市高浜川遺跡、山持川川岸遺跡、斐伊川鉄橋遺跡、白枝荒神屋敷遺跡などである。前述のように山持川川岸、白枝荒神屋敷の両遺跡は標高5m以下のより低い微高地に立地し、斐伊川鉄橋遺跡も前述のように河床下深くから土器が検出されている。これらの諸遺跡は、集落としての存続期間が比較的短いという特徴をもっている。これに対し天神遺跡や矢野遺跡では集落が長く継続しており、特に矢野遺跡の場合採集された弥生土器の散布状態や量からみて後期前半が集落発達のピークと考えられる。この時期には集落の中心部と目される第1地点で碧玉製管玉を副葬した土壇墓が発見され、集落

内部に階層の分化してきていることが認められる。<sup>14)</sup>

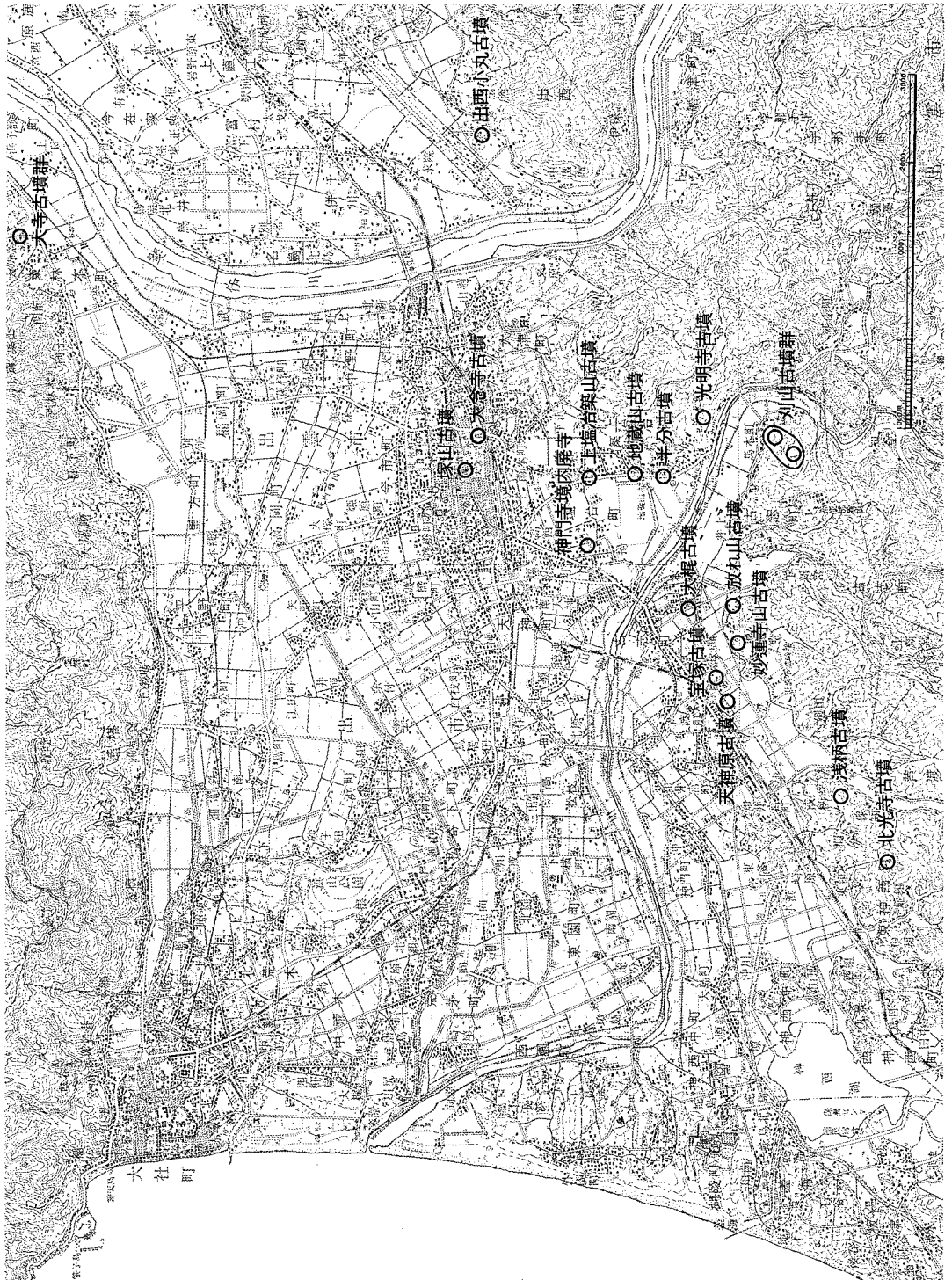
弥生時代後期後半に入ると集落相互間の優劣・強弱の差も顕著になり、地域的な統合が進み始めたと想像される。このような動向と関して注目されるのは矢野遺跡第3地点から吉備系の特殊土器が出土したことである。<sup>15)</sup> 未だ関連する遺構は発見されていないが、出雲市西谷丘陵遺跡の四隅突出型墳丘墓の成立とも合せて今後追究されねばならない問題がある。<sup>16)</sup>

### 3. 古墳時代

古墳時代前期の集落は、弥生時代中期以降より継続するものが多いが、この時期までに廃絶する集落としては、「神門水海」の汀線周辺部の低湿地に立地していた高浜川遺跡や白枝荒神屋敷遺跡および多聞院遺跡が挙げられる。<sup>17)</sup> 両遺跡の現地表面の標高は4mと極めて低いことが影響したものであろうか。

前期も後半に到ると弥生時代中期以降の主要な集落が次々と姿を消している。北山南麓付近の山持川川岸遺跡、里方別所遺跡、斐伊川流域の斐伊川鉄橋遺跡、石土手遺跡、太歳遺跡であり、これらは、旧自然堤防や微高地等の低地に立地している。また、矢野遺跡に代表される四絡遺跡群においても、前期から中期にかけての遺物は少なく、その出土範囲も限られており、集落規模の縮小が考えられる。<sup>18)</sup>

さて、これら低地集落の廃絶や縮小の原因については、発掘例が少なく明確にし得ないものの、ほとんどの遺跡において、遺物包含層上に大量の厚い砂が堆積しており、斐伊川・神戸川両河川の洪水によることがまず挙げられる。次に、前記した海水準の変化による「水海」付近および河川の河口付近の低地



第8図 古墳時代以降の遺跡位置図

の劣悪な生産条件を克服し切れない農業経営にも要因があったと推定される。<sup>19)</sup>

これら集落の消長を物語るかのようには前期から中期の古墳も分布している。平野の中央部に所在する弥生時代後期後半に出現した西谷墳墓群の中にはこの時期に属する古墳は未発見であり、また、周囲からも前期古墳は知られていない。しかし、北山山麓には全長52mの前方後円墳で竪穴式石室を内部主体とする大寺古墳（出雲市東林木町所在）<sup>20)</sup>が、また、神西湖周辺部には径24mの円墳で、箱式石棺と木棺の3個の主体部からなり、銅鏡と筒形銅器を各2個を副葬する山地古墳（出雲市神西沖町）<sup>21)</sup>や舟形石棺を内蔵する雲部古墳（簸川郡湖陵町）<sup>22)</sup>が存在する。前者の付近には小規模な扇状地が発達し、また後者周辺には低丘陵が多く存在し、共に集落を営むに格好の地である。現在、分布調査は不十分であるものの、各々の地域で集落遺跡が数ヶ所確認されている。

なお、平野中央部でも、神戸川下流域においては微高地上に集落は安定的に営まれており、天神遺跡、宮松遺跡、古志本郷遺跡等からは各時期の遺物が出土している。

その後、古墳時代後期に至って、再び集落は増加、拡大する。弥生時代の集落址が認められる微高地や丘陵の山麓に多くの遺跡が知られている。これは斐伊川・神戸川の治水と乾田開発が著しく進んだことによるものと思われる。これに呼応するが如く、後期に属する古墳が神戸川下流域に多く分布している。主要な古墳には全長約92mの前方後円墳で、長大な横穴式石室をもつ大念寺古墳<sup>23)</sup>（出雲市今市町）や径約40mの円墳とされ、整備な横穴式石室をもつ上塩冶築山古墳（出雲市上塩冶町）<sup>24)</sup>がある。また、平野周辺には古墳

築造と軌を一にして、横穴群も一時に出現し、<sup>25)</sup>集落の成立、発展と古墳、横穴群築造が密接に関連していることを示している。

これを可能としたのは、高度な土木技術の導入と各集落間の労働力の再編成であり、その過程で労働力を掌握、統率する首長層が形成されたものと考えられる。

#### 4. 奈良時代

奈良時代における集落の概要は、西暦733年編纂の『出雲国風土記』によりほぼ窺い知ることができる。同書によれば、斐伊川（出雲大川）は西流し、<sup>26)</sup>神戸川とともに「神門水海」に注いでいたのであるが、この川を境に、北側が出雲郡、南側が神門郡に区分され、北山山麓には出雲郡杵築郷と伊努郷が、平野中央部に神門郡八野郷（四絡遺跡群一帯）と塩冶郷および高岸郷が、平野南部に日置郷・朝山郷・古志郷が、神西湖周辺部に滑淡郷が位置<sup>27)</sup>していた。

現在確認されているこの時代の遺跡は、第8図にみる如く、「神門水海」と砂丘を除く大部分の斐伊川・神戸川の旧自然堤防・微高地、平野南部の山麓・北山の扇状地等に立地し、現在の集落とほぼ重なっている。

しかし、これらの遺跡を『風土記』の郷との関係については十分な調査が行われておらず郷の比定および集落の実態解明は、今後の課題である。

註1) 酒詰仲男他「島根県菱根遺跡発掘報告」（同志社大学出雲古文化調査団『出雲古文化調査団報告書』）、1959年

島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』、1980年

2) 村上 勇・川原和人「出雲・原山遺跡の再検討——前期弥生土器を中心にして——」（『島

- 根県立博物館調査報告』第二冊), 1979年
- 3) 池田満雄・足立克己 「出雲市矢野遺跡出土の縄文土器」(『島根考古学会誌』第4集), 1987年
- 4) 註1)の島根県教育委員会編に同じ
- 5) 宍道正年 『島根県の縄文土器集成』I, 1974年
- 6) 大塚初重 「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」(『考古学集刊』2-1), 1963年  
この他にも多聞院貝塚に関しては註1)の島根県教育委員会編等いくつかの関係報文がある。
- 7) 川上 稔・赤沢秀則 「出雲・山持川川岸遺跡」(『島根県埋蔵文化財調査報告書』第VIII集), 1981年
- 8) 出雲考古学研究会 「出雲平野の集落遺跡I」(『古代の出雲を考える』3), 1983年
- 9) 註2)に同じ
- 10) 出雲市矢野遺跡に関する文献の主要なものには、以下のようなものがある。
- a. 池田満雄 「矢野貝塚」(『出雲市の文化財』第1集), 1956年
- b. 山本 清 『島根県出雲市矢野町貝塚調査概報』, 1957年。この報文は島根大学山陰地域研究総合センター刊の『山陰地域研究』第3号(1987年)に再録されている。
- c. 出雲考古学研究会編 「出雲平野の集落遺跡I」(『古代の出雲を考える』3), 1983年
- d. 出雲考古学研究会編 「出雲平野の集落遺跡II—矢野遺跡とその周辺—」(『古代の出雲を考える』5), 1986年
- e. 田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本 清・磯田由紀子 「出雲市矢野遺跡の研究(I)」(『山陰地域研究』第3号), 1987年
- 14) 註10) - c, dに同じ
- 15) 註10) - dに同じ
- 16) 出雲考古学研究会 「西谷墳墓群」(『古代の出雲を考える』2), 1980年
- 17) 註10) - cに同じ
- 18), 19) いずれも註10) - dに具体的な考察を示している。
- 20) 山本 清 「古墳」(『出雲市誌』), 1951年
- 21) 出雲市教育委員会 『山地古墳発掘調査報告書』, 1985年
- 22) 山本 清 「山陰の石棺について」(『山陰古墳分化の研究』), 1971年
- 23) 出雲市教育委員会 『史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書』, 1984年
- 24) 註20)に同じ
- 25) 註1)島根県教育委員会編に同じ
- 26) 『出雲国風土記』において出雲郡出雲大川の条には次のように記載されている。  
「北に流れ、更に折れて西に流れて、即ち伊努・杵築の二つの郷を経て、神門の水海に入る。此は則ち、謂はゆる斐伊の川の下なり。河の両邊は、或は土地豊沃えて、五穀、桑、麻稔りて枝を頗け、百姓の膏腴なる藪なり。或は土體豊沃えて、草木叢れ生ひたり。」
- 27) 加藤義成 『出雲国風土記参究』, 1957年

#### IV 出雲平野における原始・古代集落の分布とその特徴

##### —— 結語に代えて ——

われわれは今回の分布調査の実施を通じて斐伊川以西の出雲平野に約80個所の遺跡が存在することを確認することができた。但し、これらがかつて出雲平野に営まれた原始・古代集落の総体の何程に相当するかの判定は困難である。その理由の一つは、われわれの分布調査も含めてこれまで多くの研究者が必要

な踏査を行い、成果を積み上げて来ているにも関わらず、なおいくつかの未踏査地域を残しているということ、その二としては、斐伊川鉄橋遺跡等にみられるように遺跡そのものが地下深く埋没している可能性もきわめて高いということである。したがってわれわれが知りえた約80個所の集落遺跡数が、あくまで相対的なものに過ぎないということは自明とせざるをえない。

しかしながらそのような制約は十分考慮するにしても、すでに指摘されているように、それらの集落遺跡が分布において一定の傾向と特徴を示しているという事実注目する必要がある。そこで本項では、まず先行の出雲平野の集落遺跡に関する諸研究の到達点を踏まえ、今次分布調査の結果と時代別の分布相の考察に導かれながら原始・古代集落遺跡の分布の在り方と特徴並びにその意義について若干の総括を試みることにする。

出雲平野における古代集落の意義とその研究課題については、1955年に池田満雄が嚆矢的発言を行って<sup>1)</sup>いる。池田は出雲の古墳文化を概括するなかで、西部出雲に分布する大形古墳成立の歴史的条件的問題に触れて次のように述べている。「ここに簸川平野の開発に関連して考察しておかねばならぬのは土師器散布地についてである。土師器の散布地はいずれもその時代の集落の発達、地形の変遷などを考えるのに重要な資料である。ここでとくに注目したいのは、簸川平野の中央部に存する出雲市大塚町、矢野町一帯の地域のことである。この部落はその名を大塚と言う如く現在も径十米余の墳丘が残っているが、この地帯は土器様式から考えて少なくとも五世紀頃には相当の集落の発展していたことが考えられ、この付近が後に、風土記の記すところの

八野郷の一部を構成することは、ほぼ誤りないことであろう。このような遺跡は簸川平野の中に他に多数あるであろうが、それらが明らかになれば、簸川平野における集落の発達、河道の変遷等をも考える上に、興味ある資料を提供することになるであろう」と。

この行りは、「風土記神門郡古志郷の記載は古志の郷名の起源説話として、日淵河を修めて池を作る場合に、古志の国人を使役して堤防を築いたと伝えられるのは、かかる開墾の伝説を伝える一断片であろう」を承て、大形の古墳に埋葬される首長達が沖積平野の開発に乗り出したことを論じ、そうした開発の軌跡を捉えるために集落址の調査が必要であることを示したものである。ここには西部出雲の古墳群解明が古代集落址研究と整合的に進められるべきことが強調されており、その際にわれわれのいう四絡遺跡群の調査・研究が『風土記』の記載に照らしてもとりわけ重要であることが説かれていると考える。このような指摘は、今日の出雲平野における原始・古代集落研究の課題を先駆的に提示したものと受け取れる。しかし1959年と1964年に池田はほぼ同一のテーマで報文を公表しているが、報題の制約もあつてか上記の問題には特に言及<sup>2)</sup>していない。

出雲平野の遺跡群を集落研究の立場から、これを総体として捉える作業を一貫して推進してきているのは出雲考古学研究会であり、現状における主要な達成の栄は斯研究会に帰せられるべきであろう。1979年に刊行された『古代の出雲を考える 1 天神遺跡の諸問題』は同研究会による出雲市天神遺跡の発掘調査の成果を報じたものであるが、ここでは出雲平野における最大クラスの集落址である天神遺跡の意義をより明らかにするために平

野形成の自然史的過程と古代集落の展開過程とを相関的に捉え、そこに天神遺跡を位置付ける試みが示されている。これは先述の池田の提起を具体化して実践したものとすることができ、その動機付けになったのは70年代に激しく進行した都市開発による遺跡の破壊であった。1980年の東森市良・西尾克己らによる『上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』ではこの方法がより徹底的に駆使されており、出雲平野とその周辺における原始・古代集落と古墳・墳墓の歴史的展開の総合的なデッサンがなされている。以後の当該地域における遺跡研究はこの素描を確認しながら、分析の精度を高め、遺跡群の構造的把握と地域的特性の解明を進めることが大きな課題となってきたといえる。

1983年出雲考古学研究会は、故人となった新宮一世起の所蔵品を採集遺跡毎に整理し、12個所の遺跡についてその現状と遺物に関する個別的な記載を行ったうえで出雲平野における原始・古代集落変遷の概要と特徴を明らかにしている。それによると集落立地の面から①砂丘上にあるもの、②山麓の小扇状地に位置するもの、③沖積地の自然堤防上のものに分類され、それらは総じて標高5mの等高線以上の地点に立地することが指摘されている。また集落の形成と発展の問題に関しては、縄文時代の後・晩期の遺跡と重複する形で弥生時代の前期集落が少数出現し、続いて弥生時代中期後葉より後期前葉にかけて集落増加の頂点が見られるとする。さらに弥生時代後期後葉頃までには「神門水海」がほぼできあがるが、その形成過程と集落の増大との間には相関関係があるとしている<sup>5)</sup>。

出雲平野の集落遺跡を正面から取り上げて論じたのは、これが最初と思われるが、とり

わけ注目されることは土器型式の連続・非連続を手掛かりにして①長期にわたって継続する集落と②短期間で廃絶する集落の二類が識別されていることである。このような分類は、かつて田中が南関東地方の弥生時代集落を考察した際に同様な認識を示したところで、田中は①を「拠点集落」とし、②を「周辺の集落」と名付け、両者は今日の中核都市とその衛星都市のような位置関係にあったことを想定した<sup>6)</sup>。

以上の指摘と関連して看過できないのは、故新宮一世起の見解である。新宮は自らの踏査によって、出雲平野においては矢野遺跡を中心に平野の各地に集落が分岐していったことを想定しているが、この仮説的発想は今日のわれわれの集落研究の出発点と通じる内容を含んでおり、新宮の地道な調査と炯眼に改めて敬服するところである<sup>7)</sup>。

出雲考古学研究会の集落研究は、1986年に矢野遺跡の解明に直に向かうことになる。『古代の出雲を考える 5 出雲平野の集落遺跡 II - 矢野遺跡とその周辺 -』では、矢野遺跡が近接する微高地上の諸遺跡と一体に成って四絡遺跡群を形成すること、また矢野遺跡では土器散布の顕著な第1から第4の4地点が認められ、集落範囲が広大であることと出土遺物の量・質がきわめて豊かであることから中核的な集落として存在したことが実態的に説かれている。

以上の先行研究に導かれてわれわれは今年も矢野遺跡の発掘を継続し、その構造の変遷と特徴の把握に務めた。その成果については別途報告を予定しているが、他方平野全域の集落遺跡の分布相と変遷過程についても解明に手を着けた。当面の成果と課題を提示すれば凡そ次のようになる。

時代 遺跡名	縄文時代		弥生時代			古墳時代			奈良時代
	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	
菱根遺跡 大社境内遺跡 原山遺跡 南原遺跡 鹿蔵山遺跡 修理面本郷遺跡 中分貝塚遺跡	(縄文時代早期末)								
高浜川遺跡 里方別所遺跡 山持川遺跡 岡野宅付近遺跡									
矢野遺跡 白枝荒神遺跡									
太歳遺跡 石土手遺跡 斐伊川鉄橋遺跡									
天神遺跡 高西遺跡 神門境内廃寺 宮松遺跡 築山遺跡 角田遺跡 三反谷遺跡									
古志本郷遺跡 田畑遺跡 上組遺跡 知井宮多聞院遺跡									

第9図 出雲平野集落遺跡消長表

(この表は各遺跡より採集された遺物の時期幅をあらわしたものである。範囲が限定できなかったものについては波点で示した。)

①神戸川西岸については、略東西方向に横たわる3列の自然堤防を認めることができる。第一列は古志町本郷から知井宮町にかけて細長く広がっており、基部と先端に幅広い微高地がある。弥生時代中期中葉から古墳時代、さらに奈良・平安時代、中世と続く古志本郷遺跡はこの基部に位置している<sup>8)</sup>。先端部の知井宮多聞院遺跡もその上限が古志本郷遺跡とほぼ同時期にあり、以後も平行して営まれている。両遺跡の間には田畑遺跡（弥生時代中期）や宝塚古墳（横穴式石室墳）がある。この第一列の自然堤防の南側は東西に帯状に広がる水田を隔てて山丘地帯となり、丘麓には妙蓮寺山古墳（前方後円墳、全長49m、横穴式石室）が造られている。おそらく第一列南側の微高地緩斜面から低湿地の平坦部にかけて階段状に水田が開かれ、北側は弥生時代には「神門水海」の岸辺となっていたと思われる。先の2遺跡がいずれも小規模な貝塚を伴っていることがその証明となる。そして古墳時代に入ってから北側も陸化が進み、耕地造成が可能となったのではなかろうか。

第二列は第一列の北側にあり、これと大体平行するか少々北西方向に彎曲した自然堤防である。第一列と比較してやや巾が狭く、長さも及ばない。この微高地上では須恵器や土師器の破片が採集されているので主として古墳時代以降に居住が行われたようである。その際第一列とこの自然堤防の間の低湿地が比較的安定した耕地として利用されたことを想定したわけであるが、同時に第二列の先端が現在の国道9号線に接していることからして「神門水海」の汀線は9号線付近まで後退し、神門橋から山地の孤立丘辺りまでが「豊葦原」化したものと想像される。このような農業生産基盤の拡大が古墳時代前半期に属する山地

古墳、北光寺古墳成立の背景をなしたものとすることができよう。

第三列の自然堤防は9号線の北側を、これと平行して東西に細長く連っている。この列の成立によって「神門水海」が遮断され、神西湖が出現したものと考えられる。その形成年代については出雲市神西沖町の引舟会館東遺跡から江戸時代初期の陶器片が採集されたことにより近世初頭以前とすることができているが、『風土記』の記載からすれば上限はさらに遡るであろう。いずれにしても第三列自然堤防が神戸川西岸域で最も新しく形成された微高地であるとするならば、弥生時代から奈良・平安時代にかけての水田地帯は第三列と南対岸の山丘との間に広がる低湿地に開かれていたとしなければならぬであろう。とりわけ第一列の南側、山地の孤立丘の東側の湿地帯は洪水の被害の少ない個所として早くから耕地化が進められたのではなかろうか。その開発の中核的な集団は古志本郷の集落と系列下にあった第一列の集落群によって構成されたものと考えられる。『風土記』に言う古志郷の起源説話はこの間の事情を反映したものと見ることができよう。

②神戸川右岸については市街化が進行していることと、斐伊・神戸両川の自然堤防が複雑に分布していて微高地の範囲や方向を景観的に把握することは困難である。しかしやや微細に見ていくならば、島根医科大学辺りから出雲市白枝町井原にかけて分布する一連の微高地群の存在を指摘できる。これを右岸の第一列自然堤防とすればここでの集落形成は弥生時代中期中葉に開始されたとしなければならない。第一列の基部付近は微高地の範囲が最も広く、此処に最大級の集落址である天神遺跡が位置しているのは偶然ではない。ま



た新造院の一つに擬せられている神門寺境内遺跡もこの一角にあり、天神遺跡に神門郡家の所在を推定することの蓋然性は遺跡の立地の観点からも高いとすべきであろう。<sup>9)</sup>

第一列の先端付近には白枝荒神屋敷遺跡がある。この遺跡が標高5mのライン以下であり、位置的にも「神門水海」の中央に当る地点であることから立地条件の検討が必要となろう。採集された土器のなかには弥生時代中期後半のものが含まれていることからすれば、この時期から集落が営まれたことになる。居住を可能にする微高地の陸化が一時的な海退による水海の汀線の移動で生じたのかはたまた大規模な洪水によって急激な堆積が行われたか現状では決め手が無く、判断は難しい。今後の課題とする他はないであろう。<sup>10)</sup>

右岸第二列の微高地群は、上塩冶の丘陵北端からJ R出雲市駅にかけて分布する。基部の宮松、築山付近は幅が最も広く、ここに宮松遺跡と築山遺跡が位置している。壮麗な切石造りの横穴式石室をもつ上塩冶築山古墳は微高地基部のほぼ中央にあり、地蔵山古墳(円墳、切石造り横穴式石室)が丘陵端に造営されている。宮松遺跡は古墳時代の初めから奈良時代以降まで継続して営まれており、築山遺跡は古墳時代後期以後の集落跡と見られる。両遺跡共遺物の散布範囲が広く、築山遺跡では住居址らしき遺構や pit 群が検出されており、いずれもかなり大規模な集落遺跡と考えることができる。<sup>11)</sup>

神戸川右岸地域には、西流していた旧斐伊川の南岸地域と重複する部分があったと想定されるのであるが、具体的には明確にし得ない。ただ現在東西に延びる市街地で斐伊川南岸の自然堤防上に広がっている部分があることは容易に推定できる。例えば市街地を東西

に貫流する高瀬川は自然堤防の最高部を開鑿した用水路であり、今市町の塚山古墳は微高地に立地するとされている。こうした事実からすれば現市街地下にも遺跡が埋蔵されている可能性は十分あると思われるが、発見の報には接していない。これも今後に託される課題であろう。いずれにしてもこの神戸川右岸・旧斐伊川南岸地域は大念寺古墳を筆頭とする今市・塩冶古墳群の形成に直接に関わった集落群と生産地を含んでいると考えられるので、なおいっそうの詳細な調査と研究が要請される場所である。

③矢野遺跡と周辺の遺跡群についてはすでにこれを四絡遺跡群として中間的に総括し、報告しているので詳細はそちらに譲るが、第2次～4次の調査を通じて遺跡の基盤をなす砂礫層が神戸川の堆積物に由来し、その形成年代が3000年B.P.と判明したのは収穫であった。<sup>12)</sup>問題はこの砂礫層上に縄文時代後・晩期以後の遺構がどのように包含されているかである。出雲平野の真中に存在する矢野遺跡の集落動向は、「神門水海」の消長を探る鍵となる。その意味でも良好な文化層の確認が急がれる。なお今回の分布調査との関わりで言えば矢野遺跡を中心とする四絡遺跡群、神戸川の左右両岸の第一列自然堤防上に営まれた弥生時代後期の集落群の総体と西谷丘陵遺跡の四隅突出型弥生墳丘墓との関係が追求課題として提起されてきている。

④出雲平野北部の自然堤防としては、出雲市荻杼町、稲岡町辺りから同平野町にかけて2列が認められる。今回は稲岡町より里方町を経て平野町に到る微高地列を踏査し、数箇所ですべての土器片を採集しているが、1, 2を除いては型式の判定が困難なものが多く、集落分布に関する明確な傾向の存在を指摘で

きない。しかしこの地域では既に山持川川岸遺跡、里方別所遺跡、高浜川遺跡等の弥生時代後期から古墳時代前期にかかる遺跡が知られており、今回の調査においてもこれらに先行する遺跡を検出するに至っていない。強いて付言するならば、旧斐伊川の西流によって形成された北側自然堤防の後背湿地の開発をめぐって、弥生時代後期頃より集落が営まれるようになり、それらはかなり急速に集落群として発展したことが予測される。出雲市東林木町の丘陵上にある大寺古墳（前方後円墳、全長48m、竪穴式石室）の造営は、こうした平野北部の開発を直接的な背景にして行われたものであろう。

以上の粗笨な整理によっても明らかなように、出雲平野における原始・古代集落の分布と変遷は、平野北西部・中央部を基点にして漸次平野の南部へと拡大し、比較的安定した微高地上に拠点的な集落が形成され、周辺にはそこから派生した集落が併存するという形で展開している。注目されるのは、拠点的な大集落がきわめて長期間にわたって営まれていることである。このような固定性と継続性は出雲平野の集落の一特性としてよいと思われるが、さらに平野の地質学的、地理学的な形成史・変遷史との整合的な考察を進めることが必要であろう。

- 註1) 池田満雄 「古墳時代における出雲国」(『私たちの考古学』5), 1955年
- 2) 池田満雄 「出雲・石見・隠岐の古墳文化」(『私たちの考古学』20), 1959年  
池田満雄 「出雲地方における古代文化の展開」(『日本考古学の諸問題』), 1964年
- 3) 出雲考古学研究会 「天神遺跡の諸問題」(『古代の出雲を考える』1), 1979年

- 4) 島根県教育委員会他 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』, 1980年
- 5) 出雲考古学研究会 「出雲平野の集落遺跡 I」(『古代の出雲を考える』3), 1983年
- 6) 田中義昭 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」(『考古学研究』87), 1976年  
田中義昭 「南関東の弥生時代集落」(『考古学研究』100), 1979年
- 7) 新宮一世起の見解は、1964年2月に松江考古学談話会例会会で発表されたものである。
- 8) 古志本郷遺跡については、これまでに正式な調査が行われておらず、実態は不明であったが、1987年12月に出雲市教育委員会が、遺跡の範囲確認調査を実施し、弥生時代中期以降継続的に営まれた集落遺跡であることを明らかにした。
- 9) 天神遺跡に関する文献は、前項の註に示した。
- 10) 川上 稔氏は、弥生時代中期頃に大規模な洪水があったと想定されている。(1987年8月に行われた研究会における発表による)。
- 11) 出雲市教育委員会 『塩冶地区遺跡分布調査 I』, 1986年
- 12) 文部省科学研究費補助金一般(A)「古代出雲の展開に関する総合的研究」の自然研究グループ(島根大学理学部徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己, 教育学部社会科教育研究室林 正久の各氏)の研究発表による。

なお、個々の遺跡の報告書類については、註記を最小限に止めた。前項註との重複を避けるためである。

## あとがき

※ 本稿は以下のような執筆分担によって成ったものである。

I 緒 言 田中義昭

II 1987年度分布調査の成果

1 神戸川右岸

1) 出雲平野北部方面

大西貴子

2) 馬木光明寺～上塩冶町下沢方面

宮本正保, 杉田ますみ

3) 天神町～塩冶町方面 宮本正保,

柴尾由美

2 神戸川左岸

1) 古志町天庭～芦渡町方面

宮本正保

2) 古志町本郷～知井宮町本郷方面

新海正博

3) 神門町～神西沖町方面

宮本正保

3 その他

1) 矢野遺跡周辺 佐藤雄史

2) 大社町周辺 宮本正保

III 出雲平野における集落遺跡の分布とその変遷

1 縄文時代 桑原真治

2 弥生時代 広江耕史

3 古墳時代 西尾克己

4 奈良時代 西尾克己

IV 出雲平野における原始・古代集落の分布とその特徴 —結語に代えて—

田中義昭

なお表題執筆者の項には執筆者を代表して田中義昭, 西尾克己の氏名を記載した。

※ 1987年夏期の分布調査には次ぎの方々の参加があった。

有富雪子, 今岡 清, 大西貴子, 岡本悦子, 川上 稔, 桑原真治, 柴尾由美, 新海正博, 杉田ますみ, 高橋進一, 田中義昭,

西尾克己, 西尾秀道, 林原 修, 広江耕史, 松本美和子, 間野大丞, 宮本正保, 物部茂樹 (敬称略, アイウエオ順)

※ 分布調査と平行して行った矢野遺跡第3地点の第4次調査は下記の諸君の手で進められた。

神林和夫, 佐藤雄史, 田島良平, 松尾晴司, 松山智弘

今次調査においても出雲市教育委員会の援助を受け, また鐘推蔵吉, 藤間広吉両氏には前回に引き続き助成いただいた。あわせて感謝申し上げる次第である。

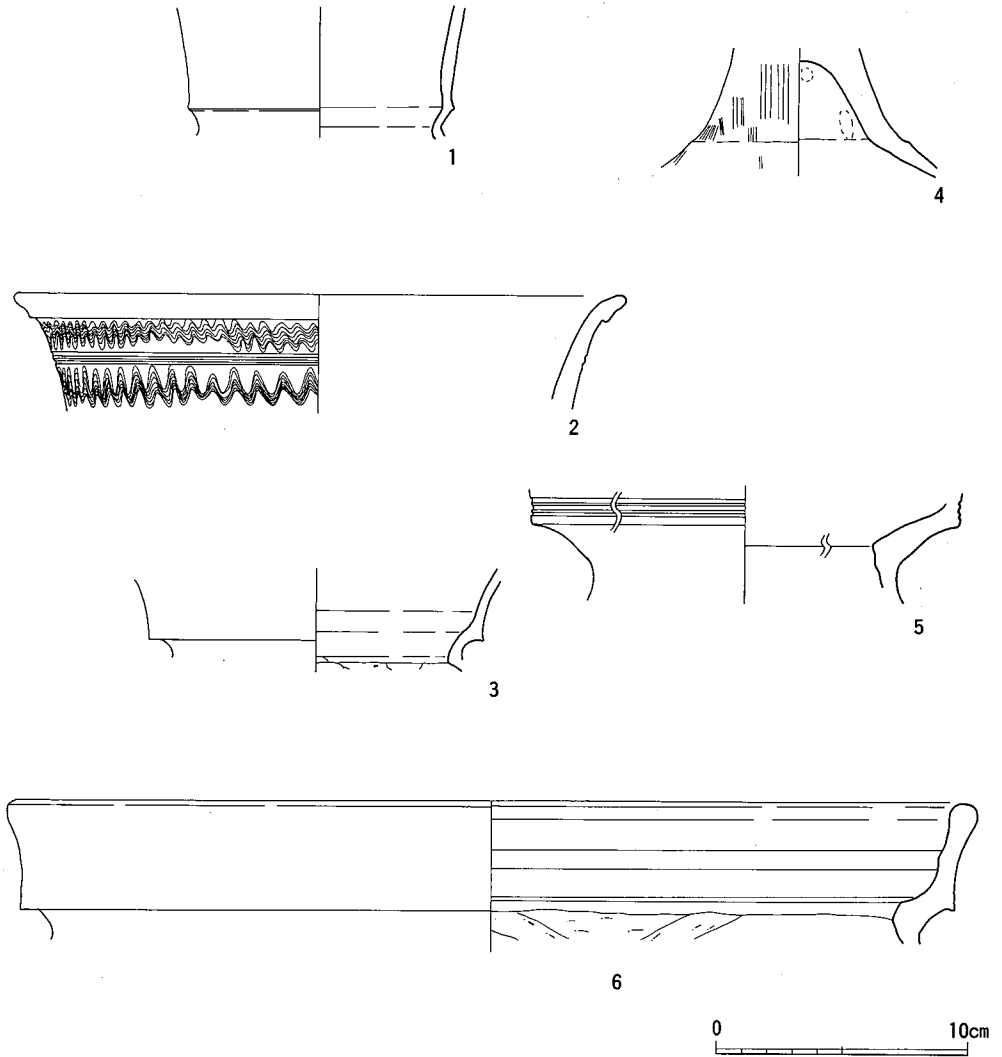
※ 分布調査採集遺物の整理は以下の諸氏によって行われた。

大西貴子, 岡本悦子, 桑原真治, 佐藤雄史, 柴尾由美, 新海正博, 杉田ますみ,

田中義昭, 西尾克己, 西尾秀道, 林原 修, 広江耕史, 松山智弘, 間野大丞, 宮本正保, 村上 勇, 物部茂樹

※ 本稿作成のための図版整理・トレース・原稿清書等の編集作業は, 執筆者の他以下の諸氏の協力があった。記して負う所を明らかにしたい。

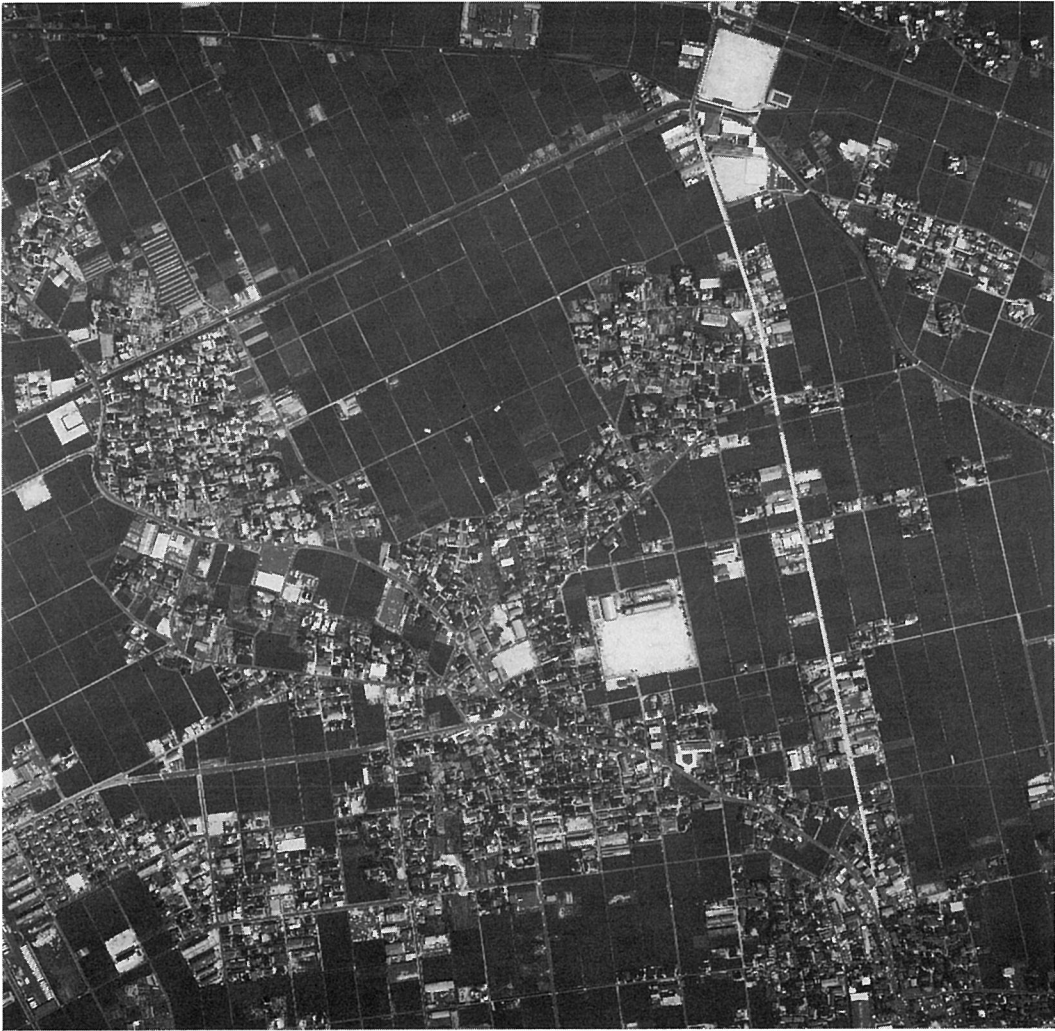
岡本悦子, 西尾秀道, 林原 修, 松山智弘, 間野大丞, 物部茂樹



第10図 採集遺物実測図

表7 採集遺物観察表

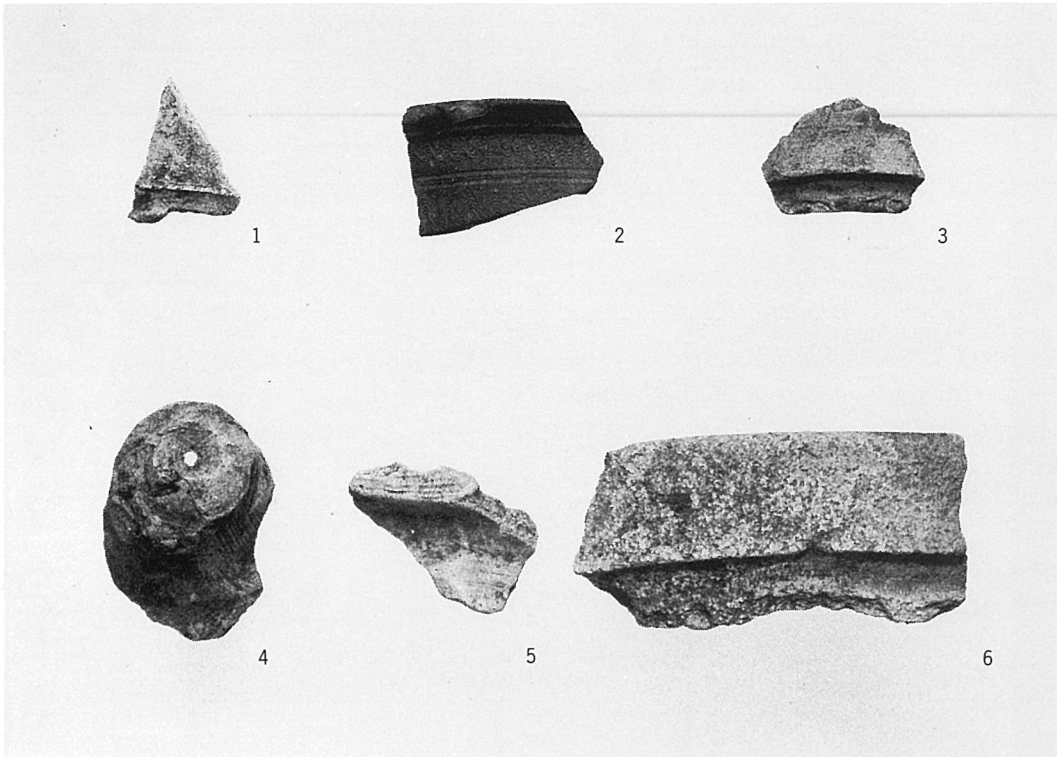
番号	採集遺跡	器種	法量(cm)	色調	形態・文様の特徴	手法の特徴	備考
1	図1-5	土師・壺		灰白色	垂直に立ち上がる口縁	内外面ともナデ	焼成良好
2	図2-5	須恵・甕	口径24.0	青灰色	口縁部外面に沈線と波状文	〃	口縁部のみ
3	図2-15	土師・壺		茶白色		内面頸部以下ヘラケズリ	胎土密
4	図2-20	弥生高坏		赤茶白色		外面粗いタテ方向のハケ 内面ナデ	外面に赤色顔料 脚部のみ
5	図3-33	古墳弥生・壺		灰白色	上方に突出する口縁	口縁部外面に凹線 内外面ともナデ	口縁部の1部のみ
6	白枝荒神屋敷	土師器	口径37.8	灰白色	厚い器壁	内面頸部以下ヘラケズリ 他はヨコ方向のナデ	風化が激しい



矢野遺跡周辺鳥瞰図



天神遺跡周辺鳥瞰図



採集遺物